

装飾付須恵器

一日ノ岡堤谷須恵器窯跡一

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

須恵器窯跡を調査 1995年夏、山科区に所在する日ノ岡堤谷須恵器窯跡を調査しました(リーフレット京都No. 88)。この窯からは杯身・杯蓋・高杯・短頸壺・長頸壺・甕・^{はそう}甗・提瓶・平瓶・播鉢などの須恵器が出土し、古墳時代終末期(飛鳥時代)に属することが判明しました。特徴としては、古墳時代に普遍的に使われた杯身・杯蓋は小型化し、つまみが付く蓋とそれに合う身が新たに出現します。

一方で、壺類や高杯の口頸部・脚部には波状文を施し、さらに脚部には透孔を入れるという古墳時代から続く意匠が見られます。古墳時代の須恵器にみられる装飾性の多さは、葬送儀礼の場に須恵器が使われたところに要因があるとされます。

装飾付須恵器が出土 須恵器壺や器台に人物や動物、壺や高杯などのミニチュア装飾品を載せた器形を「装飾付須恵器」と総称します。壺では肩部に、器台では杯部の先端に装飾品が載ります。長い脚には波状文と透孔を施し見栄えよく仕上げられています。

日ノ岡堤谷窯跡からは「子持器台」に分類される製品が1点出土しました。焼け歪みがひどく、不良品として廃棄された製品とみられます。これまで図化されずに今

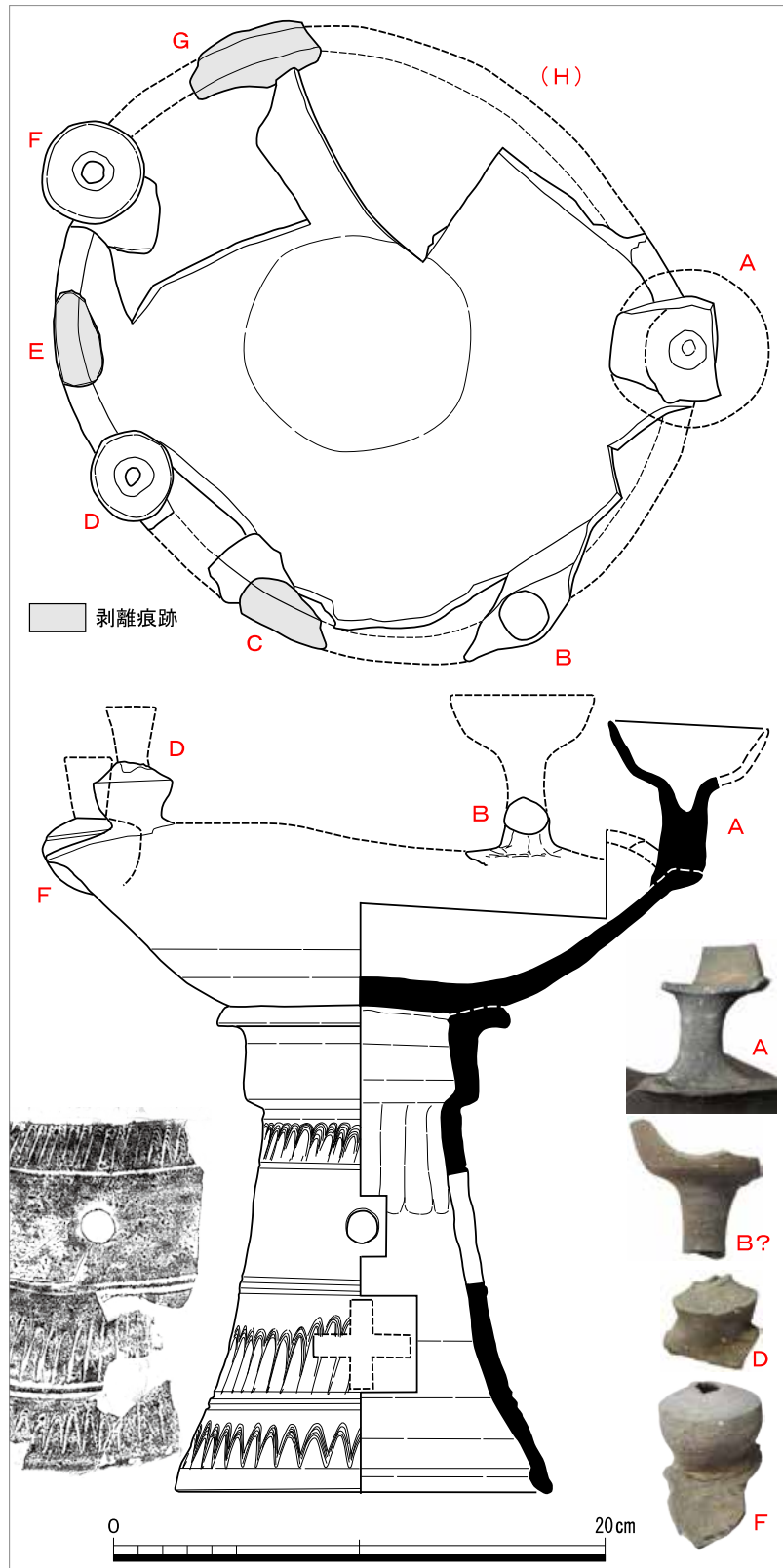


図1 装飾付須恵器(子持器台)実測図

日に至りましたが、今回改めて取り上げ、作図・復元してみました(図1・写真1)。

子持器台の観察 長い脚部に浅い杯部が載る器形です。器高は27cmほど、装飾品を含めた全体の高さは32.5cmに復元されます。杯部は歪みが大きく、楕円形を呈しますが、本来は口径25cm、深さは7cm前後あったとみられます。

ミニチュア装飾品は4個(無蓋高杯2個と長頸壺とみられる壺2個)が残存します。正確な配置は判明しませんが間隔からみて、A(高杯)、B(高杯)、C(種類不明)、D(壺)、E(種類不明)、F(壺)、G(種類不明)、H(推定)の8個が載せられていたと想定できます。

器台部と脚部の接合部には突帯をめぐらせ、下に幅3cmほどの段差を設けます。この段差は折り曲げ成形で作られており、接合箇所を太くすることで杯部との安定を図ったとみられます。

脚部は3箇所に沈線をめぐらせ4段に区分します。1段目は先端を開き気味とし、外面に波状文をめぐらせます。2段目も波状文をめぐらせ、十字形の透孔を対面に穿ちます。3段目は円孔と三角形の透孔をそれぞれ対面するように穿ち、波状文は施しません。4段面は幅約1.5cmと狭く、波状文を密にめぐらせ透孔は穿ちません。

2段目の十字形透かしは古墳時代の壺や器台には例が乏しいものです。一方、飛鳥・奈良時代の陶硯(円面硯)には十字形透孔を施すものがあるので、その影響を受けたとも考えられます。

市内出土の装飾付須恵器 右京区巽1号墳は、6世紀後半に属する規模の大きな横穴式石室を主体部とします。子持器台(写真2)は臚(体部の孔はない)4個と長頸壺3個の合計7個が載せられ、脚部は沈線5条で6段に区分してそれぞれに三角形透孔が上下一列に穿たれます。杯の中央部に剥離痕跡があるため、中心に大型の壺が載せられていたとの指摘があります。

西京区大枝山22号墳の子持壺(写真3)は、規模のやや大きな円墳の横穴式石室の開口部から出土しました。壺肩に広口壺が6個載せられ、壺肩と壺・脚部との接合部の2箇所には突帯がめぐります。

このほか、伏見区の醍醐1号墳(写真4)と西京区の芝1号墳から装飾付壺が各1点、右京区の大覚寺2号墳、同3号墳からも装飾付壺1点が出土しています。

子持器台の行先 装飾付須恵器は首長墓や群集墳中でも規模が卓越する古墳から出土することが知られています。葬送儀礼の場を荘厳にすることで被葬者の権威を高める用途があったのでしょうか。透孔を穿ち波状文をめぐらせた長い脚部も見栄えを良くする意匠といえます。

しかし古墳時代終末期の首長墓に比定される大型円墳・方墳は、京都市内では知られていません。律令制度という新たな国の仕組みが形成されつつあったこの時期に、時代遅れともいべき製品は、どこに納める予定で焼かれたのでしょうか。

(丸川義広)



写真1 全高32.5cm、脚径15.3cm



写真2 全高45.3cm、脚径25.5cm



写真3 全高33.0cm、脚径15.8cm



写真4 矢印像の高さ8.9cm